

□ 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

「あまねく」という語があります。「普く」とも「遍く」とも書きます。

「A普通」といえば、ありふれたこと、なんの変哲もないことを意味しますが、元は「制限」や「限定」に対置される言葉でした。「制限選挙」に対して「B普通選挙」「特別限定列車」（急行列車）に対して「普通列車」、つまり特別な切符なしにだれでも乗れる列車、というようにです。

その「普通」がいま、元の意味に還りつつあるのでしょうか、たとえば Chim → Pom という、ちょっと過激な現代アートの集団が「普通」についてこう語っています。『「ふつう」は僕らの中では a イガイと深いテーマでした。一般に「C普通」と言えば「飛び抜けているところがない」といったネガティブなものです。僕らの「ふつう」はそれよりも、b キバツさや真新しさや個性がもてはやされている世界（特にアートにはその c フウチヨウがありました）において、人類の「王道」を行く何か本質的な※¹ コンセプトだったよう思います』

ここで「D普通」とは、ひとの基本、つまり、ひとが生きるうえで抛りどころとなるもの、あるいはひとが心から納得でき、それにすなおに従うことができる、従わなければならぬこととでも言えそうな何かです。

① 人類が編みだし、絶えず修繕、改良しながらその実現に務めてきた「普通」の一つが民主主義です。民主主義をわたしは、『だれもを「一」と捉え、「二」以上とも「二」以下とも考えないこと』というふうに理解しています。

ひとが「一」であるというのは、社会のなかでだれもが同じ資格をもつものとして認められているということです。個人はそこ遇とか d カイソウとか財産による制限を受けずに、すべての人がそれぞれ「一」として数えられるということです。個人はそこでは、生活状況の差異を※² 捨象して、同質のものとみなされる。つまり社会の構成単位とされるのです。

これは今でこそ「普通」のことですが、じつは、まぎれもなく人びとが夥しい犠牲者を出し、勝ち取ってきた価値の一つです。人類の歴史は、家族や地域といった小さな社会が別の社会と出会い、交易しあい、支配／被支配の激しい抗争を潜り抜けて、やがては民族、国家といったより大きな社会のなかでみずからを捉えなおしてゆく e カテイでした。それはやがて「人類」という共同体の一員としてじぶんたちを理解するような段階にまで至りました。それぞれの国家は独立で対等のものとみなされ、諸国民はさらにその国家を超えて、「二」としての普遍的な権利をもつと考えるようになりました。それが②「人権」です。わたしたちはこうしてみずからを「人類」（世界市民）という「最上級の共同体」（V・ジヤンケレヴィッチ）とみなすようになりました。

あまねく成り立つようにみえるこうした理念はしかし③ある看過できない危うさを孕んでいます。

家族という最小の共同体から「人類」という「最上級の共同体」まで、人びとが共同体を形成するときには、つねに、ある価値、ある理念の共有が前提となります。共同体は人びとの存在を一つに約めるものだからです。共同体は人びとを同一の価値の下に糾合すること、一所に結集させることを志向するからです。

どの集団、どの社会にもそれぞれに大事にしている価値の文化があります。それらを糾合するにはより高次のあまねき一つの価値に人びとを包摵しなければなりません。

この包摵はある力関係のなかでなされます。民主主義的にものごとを決めるときに、多数決によるのが一般です。多くは代議制をとつてじぶんたちの代表を選挙で選ぶわけですが、この多数決はとても危ういものです。人びとの判断や利害、※³ 嗜好はきわめて流動的なもので、だから選挙は「人気投票」のようになります。反対に、こうした不安定を嫌つて人びとがこぞつて安定した一つの体制を望むとすれば、それはそうとは気づかれぬうちに『独裁』へと転じてしまします。民主主義は専制にも親和的なのです。

民主主義はしかし、民衆の多数決でものごとを決めることがないのです。「一つ」への決定は、それに同じないものをゼロにしてしまうからです。多数決で否認された人たち、それをゼロにしないことが、ほんとうの意味での民主主義です。民主主義は、決定の装置ではなく、決定の前後を含むもの、つまりは決定に至るまでの対話と調停の工夫、そして決定された後、否認された者への配慮を濃やかになすプロセスとして機能してはじめて、より『あまねきもの』へのたしかな途となります。

そのためには、民主主義は、多文化主義へと、差異と多様性の肯定へと、その重心をずらさねばなりません。とはい、多様性と言った瞬間、わたしたちはもう多様なものを持つべき場所に立っています。多様性もまた全き「一つ」の視点になりかねないのです。たがいに異質な他者どうしが、上空からではなくあくまで地べたで、横向きに探りあうという関係がそこで維持されなくてはなりません。

④ このことを心に留めておくために、オルデガ・イ・ガセットが自由主義について述べたことばを最後に引いておきます。『それは、多数者が少数者に与える権利なので、したがって、かつて地球上できかれた最も気高い呼びなのである。自由主義は、敵との共存、そればかりか弱い敵との共存の決意を表明する。人類が、かくも美しく、かくも矛盾に満ち、かくも優雅で、かくも曲芸的で、かくも自然に反することに到達したということは信じがたいことである』（『大衆の反逆』神吉敬三訳）。

民主主義は、川俣正さんがアートについて語った言葉を借りて言えば、「普通のことを普通に行つていながら、すごく普通ではないこと」（川俣正）なのです。

注 ※1 コンセプト——考え方。概念。

※3 嗜好——人それぞれに異なる好み。

※2 捨象——切り捨て、無視すること。

※4 俯瞰——高いところから見渡すこと。

問1 波線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。楷書で大きく書くこと。

問2 二重傍線部 A～D のうち、筆者が肯定的にとらえているものを一つ選べ。

問3 傍線部①「人類が編みだし、絶えず修繕、改良しながらその実現に務めてきた『普通』の一つが民主主義です」とあるが、ここでの「民主主義」の説明として最も適切なものを次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア ひとが生きる上で基盤となるものであり、国民ひとりひとりを国家以上の価値を持つものとして個人の権利を保障していくくという考え方。

イ 人類が社会を維持するために必要なものであり、個人同士の利害のぶつかり合いを避けるために社会規範を構築しているという考え方。

ウ ひとが生きる上で不可欠なものであり、地球上のひとりひとりが社会の構成単位として平等に権利を持っているといふいう考え方。

エ 人類の英知が積み重ねられた集大成であり、国家に対し国民が対等な権利を持つことで個人を中心に据えた社会を築いているという考え方。

オ ひとが生きる上で不可缺少なものであり、国家という大きな視点で個人を捉え直し、社会を構成する単なる一要素とみなすという考え方。

問4 傍線部②「人権」とあるが、ここでの「人権」の説明として適切なものを次のア～カのうちから二つ選び、記号で答えよ。

ア 人間に生まれつき備わっているもの。

イ 人間が闘つて獲得してきたもの。

ウ 人間が常に発展させていくべきもの。

エ 国家の中で自分自身を捉えなおしたもの。

オ 国家が責任を持って維持していくべきもの。

カ 国家の違いを超えて人ひとが持つてているもの。

問5 傍線部③「ある看過できない危うさ」とあるが、ここで筆者はどのようなことに危機感を持っているか。七十字以内で説明せよ。

問6 傍線部④「このこと」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア 違いや多様性を重視して、社会的弱者の意見を吸い上げるための機会を設けていくことで、物事を決定するまではもちろんのこと、決定した後も否認された少数意見からの不満が出ないようにしていこうとすること。

イ 実行された方策で網羅できなかつた側面を常に検証し、次につなげる努力をしていくことで、物事を決定するまではもちろんのこと、決定した後も否認された少数意見への配慮を示しつつ、政策を実現しようとする。

ウ 時間的な制約に縛られることなく、より多様な意見を反映した合意形成を目指していくことで、物事を決定するまではもちろんのこと、決定した後も否認された少数意見からの反発を極力減らしていこうとすること。

エ みんなが同じ地平に立つて、差異と多様性を、対等な関係の中で相互に認め合っていくことで、物事を決定するまではもちろんのこと、決定した後も否認された少数意見に気を配り、対応していこうとすること。

オ 違いや多様性を抽象的な議論で封じるのではなく、具体的な方策の案をあらかじめ想定しておくことで、物事を決定するまではもちろんのこと、決定した後も否認された少数意見を尊重しようとすること。

問7 以下に挙げるやり取りは、【本文】と【資料】を読んだ上で生徒の話し合いである。空欄I・IIに適切な表現をそれぞれ指定された字数で抜き出せ。

【資料】

日本も相当長い間にわたって民主主義を実践してきました。こうした体験を重ねてくれば、民主主義の「素晴らしい」を説く議論があるかと思えば、他方ではそれを「けなす」議論をしていい気分になつていているという向きもあります。しかし、それもそろそろ卒業すべきでしょう。日本の民主主義はまさに、こうした段階の真っ只中にいるのです。つまり、そろそろその欠陥や「誤解のわからなさ」を見据えながら、それを具体的に改善する方法を探らなければなりません。民主主義の「素晴らしい」を讃える議論とそれを「冷やかす」「けなす」議論とのやりとりは、いわば空中戦というべきものです。しかし、本当に必要なのは、地道に一步一步何をどう変えていくかという地上戦なのです。

ここでは「あれか、これか」式の空中戦ではなく、「より良く」が合言葉になります。人生の多くの局面において大事なことは、「より良く」を心がけ、実行することです。「あれか、これか」に比べると、「より良く」を探求することは派手ではなく、あまり魅力のないもののように見えるかもしれません。しかし、人間の社会や個人の人生において大事なことは、ちょっととの違いが大きな違いにつながるということです。継続的な努力が必要なのはそのためです。五十歩百歩だからといって馬鹿にしてはなりません。何も、欠陥があるのは民主主義だけではないのです。われわれ個々人も会社などの組織も、欠陥のないものはありません。それを継続的な努力によつて「より良く」していくことが大切なのです。民主主義も例外ではないはずです。

(佐々木毅『民主主義という不思議な仕組み』 設問の都合で一部省略した部分がある)

生徒W 「民主主義」とは本来、誰をも「一」、つまり「個人」とどちらえることが出発点なんだね。

生徒X でも、全員が同じ考えになるということはないから、「社会」を構成していくのは難しいと思う。

生徒Y だからこそ、多数決での決定を僕たちは尊重しないといけないんだよ。

生徒X でも、【資料】の筆者が比喩表現を用いて指摘しているように、現在の議論は「I・十字以内」になってしまっているよ。

生徒W 確かにそれは問題だよね。だからこそ、「多数決で決まったから終わり」にしないことが「民主主義」の本質だと【本文】の筆者は言っているんじゃないかな。

生徒Z そこは【資料】の筆者も同意見だよ。【資料】の中でも、共同体の中で出てくる諸問題を「II・二十字以内」姿勢が大切であると言っているしね。

生徒X なるほど。制度そのものを変えればいいという訳ではないんだ。

生徒W どのような制度においても地道に取り組んでいくことが大事なんだね。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

冬枯れた庭先に、叔母がひよっこりと姿を現した。

ステップの冷めぬ近さに住んでいる叔母は、真由美の母親がわりだつた。

「※¹ パパさん 競馬？」

「うん。暗いうちに起き出して、イレ込んでたわ」

「これ、おすそわけ。どういうわけか今年は、あちこちから林檎ばっかり。この間のも、まだ残つてるでしようけど」

「いつもすみません。ありがとう」

手渡されたビニール袋を覗くと、①大きな実が自分に向かつて微笑みかけているようだつた。叔母の顔に似ていると真由美は思つた。

たぶん、先週のものと出所は同じなのだろう。つまり、おすそわけに言寄せて、叔母は訪ねてきたというわけだ。

「シーツ干しちやつたら、お茶を淹^いれるからね」

「手伝うわ」

と、叔母は洗濯かごの中からシーツを取り出した。

あまり話しこみたくはない。

「いくつになつても落ちつかないわねえ、パパさん。競馬つて、そんなに面白いのかしら」

「ほかに道楽がないから。お酒もそんなに飲まなくなつちやつたし」

息子が嫁をもらひ、二人の娘はア嫁^いいだ。きっと叔母は、自分を末娘のように思つてくれているのだろう。決して結婚を急ぐ年齢ではないのに、次から次へと縁談を持ちかけてくる。

(そういう時代じゃないのよ、おばちゃん)

②その一言は、どうしても口に出せなかつた。

「会うだけでも会つてみてくれないかな。主人の部下なんだけどね、二十九で次男坊。背が高いのよ。ニューヨーク支店に三年

いて、ついこの間こつちに帰つてきたの。もちろん英語はペラペラ」

時代錯誤もイ甚^{たゞ}らしいと思う。たしかにこの古家の庭先には、よく似合う会話だけれど。

「仕事はできるんだけどね、ちよつと大人しいの。ああいうタイプは所帯を持つとガラツと変わるんだつて主人が言つてたから、

ちようどいいやって」

「ちようどいい、なんて——」

真由美は叔母を睨^{にら}みつけた。悪気はないのだろうが、江戸ツ子かたぎの叔母の言葉には刺^{さす}がある。

「あら、ごめんね真由美ちゃん。でもさ、よおつく考えてみて。そりやあ、あなたの会社にも素敵な男の人はたくさんいると思うわよ。言い寄つてくる人だつて少くはないと思うけどね」

「いませんよ、そんな人」

「何だかんだ言つたって、銀行員はいいわ。まずお給料がいいし、都市銀行ならつぶれる心配もないしね。ほら、※² ビッグバン

とか何とかで、銀行は大きいもん勝ちなのよ。主人のところはナンバー・ワンだからね」

叔母の声から身をかわして、真由美は縁側に上がつた。日だまりに丸くなつた仔猫を抱き上げる。

「大きくなつたね、オグリちゃん」

真由美的機嫌を窺うように、叔母は猫の名を呼んだ。

去年の暮に、同じような話をひとつ断つた。そのときは叔母の家に生まれた仔猫を一匹、引き取ることでお茶を濁したのだ。

そうした経験を考えると、叔母の猫撫^{なで}で声も胸に刺さる。

「あのねえ、おばちゃん。これだけは言つておきたいんだけど——」

猫に頬ずりしながら、③真由美は思い切つて言つた。

「お見合いとか、紹介とかね、そういう結婚の仕方つて、今はちよつと常識にからないって思うの」

「あらあら、べつに堅苦しいお見合いをしろなんて言つてやしないわ。まずはお友達から——」

「お友達から恋人になつて、別れましたじやすまないでしよう」

「そりやまあ……先さんの立場を考えるとね」

「つまり結婚が前提じやないの。やつぱりお見合いよ」

オグリを肩に載せて、真由美は台所に行つた。あちこちを補修した古い床から、冷たいすきま風が忍び入る。

山の手の^{※3} プチ・ブルジョアを絵に描いたような家。昭和の初めから時間を止めてしまつたこの家で、自分は育つた。逃れることのできぬ檻のよう思うこともある。

「こうして見ると、真由美ちゃんはおかあさんそつくりね」

叔母はしみじみと真由美の背中に向かつて言つた。

「今から思えば、みどりさんは良くやつたわ。パパさんは手のかかる子供みたいだし、頑固者のおじいちゃんと口うるさいおばあちゃん。私なんかにはとても務まらない」

中学生のときに急死してしまつた母のおもかげは臍である。思い出そうとしても脳裏にうかぶのは、病院のベッドのビニールごしに微笑む、青ざめた顔ばかりだつた。

祖父母とはうまくやつていたと思う。母が死んだとき、父はさほど悲しみをあらわにはしなかつたが、祖父母の嘆きようは痛ましいほどだつた。きっと、可愛い嫁だつたのだろう。

「正美さん、どう、このごろ」

「どうもこうもねえ」

叔母は溜息^{ためいき}まじりに言つた。叔母と嫁との不仲は、真由美にとつても悩みの種だつた。かわるがわるやつてきては、真由美こそは自分の味方だとばかりに愚痴をこぼす。言われれば相槌^{あいづち}のひとつも打たねばならない立場は辛い。

「真由美ちゃんを貰えれば願つたり叶つたりだつたんだけどねえ。うちの主人だつて、それが一番いいって言つてたのに、パパさんが理屈をこねるもんだから」

「いとこ同士は遺伝学的にはよくないつて。でも、そんなことよりも私がいやだつたもの。おにいちゃんが旦那さんになつて、おばちゃんがおかあさんになるなんて、考えられなかつた」

「やつぱり、若夫婦と同居するつていう時代じやないのかねえ。せつかく二世帯住宅に改築したのに、あれは余計だめだわ。よそよそしくなつちやつて」

「家のせいにするのはよくないわよ。どつちにしろ一生付き合つてくんだから、仲良くしなきや」

「真由美ちゃんも、結婚したらパパさんとは別居したほうがいいわよ」

「そんなの、無理よ。ひとりじや何もできないんだから」

叔母には迷惑をかけたと思う。祖母が亡くなつてからというものの、叔母は家を二軒持つてゐるようなものだつた。まるで通いの家政婦同然に、掃除も洗濯も食事の^エ仕度^{仕度}も、父の身の回りの世話もすべてしてくれた。

「おばちゃんん——」

④ふと思いついて、真由美は茶を淹れる手を止めた。

「なあに」

「いえ……何でもないわ」

思い過ごしにちがいない。だが、突然うかんだ推理は真由美の頭の中で化物のように膨らんだ。

「いけない、いけない。亭主をほつぽらかしで^a 油売つてちや叱られる。あの人こそ休みの日ぐらい競馬にでも行つてくれりやいいのに。ゴルフをやめたと思つたら、週末は家でごろごろするばかりでね。また来るわ。さつきの話、考えておいてよ」

「お茶、入つたけど

「ごめんね、お邪魔さま」

勘のいい叔母は、真由美の心の動きを読み取つたのだろう。だとすると、思いうかんだ推理は当たつてゐるのかもしれない。湯呑みを持つて、廊下のつき当たりにある父の書斎に入つた。タバコのヤニが真黒にしみついた八畳の洋間。親子二代の学者が使いこんだ、^b 神聖な知の城である。

探し物はすぐに見つかつた。銀行の大きな角封筒に入つた見合い写真と履歴書。

叔母がいつそんなものを持つてきたのか、真由美は知らない。暮の大掃除のときに、たまたま封筒を開けてしまつた。もちろん、父を問い合わせ^質はしなかつた。

読書用のロツキング・チエアに座ると、仔猫が膝に乗つてきた。

「私のじやないのよ、オグリ。パパさんの」

きれいな人だと思つた。きちんとスーツを着て、写真館で撮した正式の見合い写真なのだから、先方にははつきりとした意思があるのだろう。

「どう思う、オグリ。四十五歳、初婚。京都大学文学部卒だつて、すごいわね。新聞社の学芸部デスク。忙しいんじゃないのかな。それとも、仕事やめるのかしら」

仔猫は真由美を見上げて、抗^{あらが}うようにニヤアと鳴いた。

「だめだめ。パパさん、最後のチャンスかもしれないのよ。つまり、このままじや私もパパさんも結婚できないから、二人いつべんに面倒見ちゃおうつてことね」

離れわざだと思う。だが、誰よりも父と自分の幸福を希つている叔母の、悩みに悩み抜いた末の秘策にちがいなかつた。

自分は結婚してこの家を出る。そして、父は妻を迎える。偏屈者にはちがいない父の老後の平安は、たしかにこの方法以外には約束されないのかもしれない。

写真を見つめているうちに淋しい気持になつた。こんな古家に婿に入つて、父とうまくやつていくような都合のいい男など、いるわけはないと思う。かと言つて、**⑤父**を残しが死んだときにも嘙みつぶした涙が、毗まなじりから溢あふれた。不幸は自分を泣かせなかつたのに、**⑥幸福**が涙を流させるなんておかしい、と真由美は思つた。

母が死んだときにも嘙みつぶした涙が、毗まなじりから溢あふれた。不幸は自分を泣かせなかつたのに、**⑥幸福**が涙を流させるなんておかしい、と真由美は思つた。

※1 パパ——真由美的父で大学の准教授。叔母はその妹。 **※2** ビッグバン——金融制度の大改革。

※3 プチ・ブルジョア——主に頭脳労働を行う、経済的に中流以上の階級。

(浅田次郎『永遠の緑』)

問 1 傍線部ア～オの漢字の読み方を答えよ。

問 2 傍線部a・bの本文中での意味として最も適切なものを次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

a 「油売つてちや」

ア 人に情報を伝えて回つていては

イ 大事な役目に専念していては

ウ 他人のためだけに働いていては

エ 辛い仕事を後回しにしていては

オ むだ話などをして怠けていては

b 「神聖な知の城」

ア 家族から離れることでやつと研究に没頭できる孤独な学問の場

イ 学問の頂点を極めることだけを目指している厳しい研究の空間

ウ 他者が気軽に立ち入ることのできない誇り高い学問研究の場

エ 仕事中は研究仲間だけが入室を許される機密性の高い学問空間

オ 親子二代でようやく学問的な成果を生み出した遠大な研究の場

問 3 傍線部①「大きな実が自分に向かつて微笑みかけているようだつた」とは、どういうことか。その説明として最も適切な

ものを次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア 真由美を心配して縁談を勧めに来る叔母の温かい思いが、口実に過ぎない林檎からも伝わつてくるように思えたということ。

イ 真由美を実の娘のように思つて叔母が持ち込む縁談の条件の良さを、頂き物の林檎が象徴しているように思えたということ。

ウ 先週と同じ林檎を別のものだと偽つた叔母の厚かましさが、持参の品の林檎にも表われているように思えたということ。

エ 叔母から縁談をかたくなに断り続ける真由美の幼稚な心を、完熟した林檎がたしなめているように思えたということ。

オ 叔母と真由美との完全には打ち解け合えない微妙な関係を、袋に収まつた林檎に冷やかされているように思えたということ。

問 4 傍線部②「その一言は、どうしても口に出せなかつた」・③「真由美は思い切つて言つた」とあるが、どういう気持ちの変化があつたのか。その説明として最も適切なものを次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア 叔母とは違う結婚観をもつ真由美はあるが、叔母は真由美が少しでも早く結婚することが皆の幸せな生活につながると思つていては、将来に対する叔母の考え方を重んじようとする気持ちの方が強かつた。しかし、自分の人生は自分で決めていたいという思いを捨てることはできず、偶然の出会いを待つた方がよいと思うようになった。

イ 叔母とは違つて、結婚観を持つ真由美ではあるが、叔母は母親がわりとして全ての家事を担つてきて、誰よりも真由美の幸福を願つてくれているので、結婚に対する叔母の考えを否定したくないという思いの方が強かつた。しかし、その場のぎの対応をしていては何の解決にもならないと感じ、結婚の勧め自体を断るしかないと思うようになった。

ウ 叔母とは違う結婚観を持つ真由美ではあるが、叔母は実の母親以上に家事をこなし、真由美を我が子同然に思つてくれてるので、結婚に対する叔母の古風な考え方を守つてあげたいという思いの方が強かつた。しかし、叔母が真由美の現代的な考え方を変えようとしていることは明らかなので、お見合いだけは拒否すべきであると思うようになった。

エ 叔母とは違う結婚観を持つ真由美ではあるが、叔母は母親の代理として苦労して家事を行い、真由美にはゆとりのある生活を送つてほしいと望んでいるので、将来に対する叔母の思いを壊したくないという気持ちの方が強かつた。しかし、経済力を前提に結婚相手を選ぶという考え方方に反発を覚えて、自然な恋愛感情を優先したいと思うようになった。

オ 叔母とは違う結婚観を持つ真由美ではあるが、叔母は実の母親のように真由美の家を取り仕切つており、理想的な結婚をしてこそ真由美は幸せになると信じてるので、人生に対する叔母の考え方に対するのを恐れる気持ちの方が強かつた。

問 5 傍線部④「ふと思つていて」とあるが、どういうことを思いついたのか。七十字以内で説明せよ。

問 6 傍線部⑤「父を残して嫁に出ることもできるはずはない」とあるが、こうした状況を何に喻えているか。本文中から十字以内で抜き出せ。

問 7 傍線部⑥「幸福が涙を流させるなんておかしい」とあるが、この時の真由美は、自分の結婚についてどのように思つているか。解答欄に合わせて説明せよ。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

天下のため、国のために害なる事、世に多し。その中に、実は大いに害あれども、害と見えざる事もあり、またここには益あるなり。かしこに害ある事あり、また当分は益^aあるやうなれども、後日に大害となる事あり。これら皆人の惑ふことなり。
① 国政をとらん人づねに心を付けらるべし。

また眼前に大害と知られながらも、停めがたく、國君の勢にても、公儀の御威光にても、^bにはかには禁止しがたき事も多くあるなり。しかるにその類を、にはかにしひて禁ぜんとするときは、かへりてまた害を生じて、いかんともしがたき事もあるものなり。されば^c害ながらも、にはかに禁じがたき事は、常に心をつけて、随分長ぜぬやうにはからひ、いつとなくそろそろとこれを押さへて、おのづからと止む時節を待つよりほかなし。^cよろづの事は、日々に増長することも、思ひのほかに、またいつとなく衰へゆく時節もあるものなれば、かならず事を急にして、仕損ずまじきなり。

また国のため民のために、利益ある事を考へ出して、^dこれを行はんとするも同じ事にて、たとひ利益ある筋も、新規ににはかにこれを行はんとすれば、人も帰服しがたく、またかへりてそこなひも出来ることあるものなり。とかく人は、久しく馴れ來たりたる事は、少々勝手あしき事も、その分にて安んじ居るものなり。益ある事も、新規なる事は、煩はしく思ふならひなれば、有り来たりたる事は、少々はあしくとも、大抵のことはそのままにて有るべく、^e新規の事は、大抵はまづはせぬがよきなり。

(本居宣長『秘本玉くしげ』)

問1 波線部 a 「あるやう」・b 「にはかには」・c 「よろづ」の歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めよ。

問2 傍線部①「国政をとらん人づねに心を付けらるべし」とあるが、筆者は政治を行う者が政策を実行する際、どのようなことに注意しなければならないと考えているか。その説明として適切なもの次のア～カのうちから三つ選び、記号で答えよ。

- ア 小さな過失だと思つていたのに、後に甚大な損失となること。
- イ 片方ではよいことがあっても、他方で不利益が生じること。
- ウ 一時的には上手くいっても、後に不具合を生じさせること。
- エ 理想を追求していくものの、実現する見込みのこと。
- オ 失敗することが分かつてながら、止められないこと。
- カ 国益を損なうにもかかわらず、それが見えにくいこと。

問3 傍線部②「害ながらも、にはかに禁じがたき事は、常に心をつけて、随分長ぜぬやうにはからひ、いつとなくそろそろとこれを押さへて、おのづからと止む時節を待つよりほかなし」とあるが、害であると分かつていながら、自然と止むのを待たなければならぬと筆者が考えるのはなぜか。解答欄に合わせて説明せよ。

問4 傍線部③「これを行はん」の「ん」と同じ意味を持つものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 花は咲かる。
- イ 花の咲かぬ庭。
- ウ 我も行きぬ。
- エ 我は行かむ。
- オ 日も暮れぬ。

問5 傍線部④「新規の事は、大抵はまづはせぬがよきなり」とあるが、筆者がそう考える理由として最も適切なものを次のア～オのうち中から選び、記号で答えよ。

- ア たとえ利益がある政策であつても新しく急に実行しようとすると、従来のあり方に疑問を抱かせてしまうため、人々を堕落させてしまうから。
- イ たとえ利益がある政策であつてもよく考えずに実行しようとすると、樂をすることばかりを考えさせてしまうため、人々を安定なものにしてしまうから。
- ウ たとえ利益がある政策であつても新しく急に実行しようとすると、古来より受け継がれてきた伝統的な方法を否定してしまうため、必ず失敗してしまうから。
- エ たとえ利益がある政策であつてもよく考えずに実行しようとすると、これまでの方法にこだわる人たちとの争いの原因を生み出すため、不利益の方が多いから。
- オ たとえ利益がある政策であつても新しく急に実行しようとすると、旧来のやり方に慣れ親しんだ人々が受け入れにくく思うため、上手くいかないことがあるから。